1.　　2000 年 06 月号

「・・世間一般にユダヤ人差別があることは誰でもが認めるくせに、自分も其の一人だということは認めたがらないという事実である。教養のある人びとは、ユダヤ人差別は許すべからざる罪であり、（中略）自分がユダヤ人差別をしていないことを証明するためなら誰でも長広舌をふるう。」（小野寺健編訳『オーウェル評論集』、岩波文庫）

石原慎太郎東京都知事の「三国人」発言が報道された翌日、ある新聞社がインターネットで意見を求めたところ、異例の多さの意見がいっせいに寄せられた。それらを賛否で分類してみて唖然とした。石原発言に賛意を表する意見が圧倒的に多数なのである。しかも賛成意見に共通して書かれているのは、「自分は外国人差別などしていないが・・」という書き出しである。異口同音のこの書き出しから、外国人差別、わけても「三国人」差別が透けて見えてくるから面白い。まさに、ジョージ・オーウェルの言う英国人の「ユダヤ人差別」と瓜二つの構造なのである。

「三国人」に関する国語辞典の意味はともかく、降伏による自信喪失、勝利者への劣等感、旧植民地の人々が発する軽侮のまなざしへの反感をないまぜにして、この言葉は筆者の世代の者には屈折したテキストとして今でも生々しく立ち上がってくるのである。ついに日本文学に対して屈曲も変曲も与えはしなかったが、『太陽の季節』というセンセーショナルな短編一作によって文壇に登場し、その後は政治家として折々に言葉の物議をかもしてきた石原氏であってみれば、このテキストの裏にある記号論的な意味に無知であるわけがない。してみれば、国語辞典を読み上げてしたあの記者会見での説明は単なる言い訳としか筆者には理解できない。

それにしても、あのインターネット投稿の支持意見は寒心に耐えない。一様に外国人犯罪の多さを論拠としているが、これには統計上のトリックがあると言われている。それよりも、日本人および日本国官僚組織内部の犯罪の悪質化と急増の方が圧倒に問題なのである。

着々と民主主義の実績を上げつつあり、経済再生をいち早く果たし、日本を飛びこえてアメリカとの関係を濃密にしている韓国・台湾に対する劣等感が、この投稿に透けて見えるのは筆者だけではあるまい。